

1 横須賀市とエレコム 災害時支援の新たなパートナーシップ締結！

市長

本市はこのたび、エレコム株式会社と防災協定を締結することといたしました。協定締結に際し、本日はエレコム株式会社石見社長にもお越しいただいております。石見社長、本日は誠にありがとうございます。

昨今、甚大な被害をもたらす自然災害の発生頻度が増加しており、行政には迅速かつ適切な対応が求められています。本市は能登半島地震を受けて、防災対策の見直しや備蓄を増やすなど、各種対策を進めているところですが、行政が全てをカバーすることは非常に難しく、エレコム株式会社のような協定事業者のお力をお借りしながら、市民の安心・安全の確保に取り組んでいくことが重要であると考えています。

本日、協定を締結いたしますエレコム株式会社は、パソコン周辺機器からヘルスケア製品に至るまで、お客様のライフスタイルを豊かにする製品を約20,000点取り扱っている国内トップクラスのメーカーであり、マウスやキーボード、モバイルバッテリー・充電器など、様々なデジタル周辺機器の部門で、トップシェアを獲得されています。1日に売れている製品数は約140,000点と、エレコムユーザーは日々増え続け、まさに時代をリードしている企業です。

また、防災対策や緊急時の支援活動にも尽力されており、2020年の熊本豪雨や、能登半島地震において、被災自治体へモバイルバッテリーを提供されています。このことから、本市も災害時において、避難所や防災活動拠点へ、通信機器など必要な物資を優先供給していただくべく、防災協定を締結することといたしました。このような災害時の通信機器の提供にかかる協定の締結は、本市としましては初であり、また、エレコム株式会社も、自治体とこのような協定を締結するのは初めてだとお聞きしまして、大変うれしく思っております。

提供いただく機器としましては、まずは発災直後の避難所へモバイルバッテリーや、モバイルソーラー充電器を想定しています。スマートフォンは、今や市民の生活に必要な不可欠なものであり、災害時の情報を取得するための重要なツールとなります。災害発生後の大きな課題である電源の確保を、よりスムーズに行えるようになるため、大変心強く思います。

このほか、提供いただく機器としましては、タブレット端末などもあります。これを活用して被災家屋の調査や罹災証明の発行などを大人数で素早く実施し、市民生活の早期復旧・安定を図ることも、想定しています。

そのほかにも、エレコム株式会社ではヘルスケア事業を、エレコム株式会社のグループ会社では、カメラソリューションにも取り組まれていることから、発災後、時間とともに治安の維持が課題となってくる避難所の「環境DX」として、防犯カメラを各避難所に配置していただくことで、避難所の治安の確保や、避難者の健康維持のための健康管理製品や測定機器などを提供いただくなど、多岐にわたる分野において被災者の、生活支援にご協力いただけるものと考えています。

エレコム株式会社は、年間2,000点以上の新製品を開発されていることから、将来的には更に様々な分野でご協力できる可能性があり、大いに期待しています。

また、今回、この防災協定締結のお話をエレコム株式会社にさせていただくにあたり、エレコム株式会社が、児童養護施設の建設など、防災以外にも様々な社会貢献活動をされていることから、本市の児童福祉施設にもご支援をいただけるという、大変ありがたいお話もいただきました。この場を借りて御礼申しあげます。誠にありがとうございます。

この防災協定締結により、横須賀市はさらなる防災対策の強化が進みます。市民の皆様が安心して生活できる環境を整えるために、エレコム株式会社としっかり連携し、迅速かつ効果的な支援を行っていきます。

また、今回の協定のように今後も様々な企業や団体と連携を深め、包括的な防災体制を構築していくことを目指します。これによって、横須賀市全体で一丸となって災害に備える体制を作りあげてまいりますので、今後ともよろしくお願ひ申しあげます。私からは以上です。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

ただいまご紹介にあずかりました、エレコムの石見です。よろしくお願ひします。本日は、お忙しいところ横須賀市との防災協定締結式へお集まりいただき、誠にありがとうございます。また、この場をセットしていただいた上地市長、本当にありがとうございます。

エレコムは1986年に創業した企業で、デジタル関連機器を開発、販売し、デザイン性の高い製品を市場に提案、提供し続けています。創業時より、お客様の声を大切にしながら、変化の激しい市場のニーズをとらえ、素早く製品を提供することで、事業の拡大と成長を実現しています。いまでは、デジタル関連製品のみならず、ヘルスケアやゲーミング、アウトドア、理美容家電、ペット家電、ビジネスソリューション、グローバル市場へのチャレンジなど、新たな製品の開発、発売と事業分野に参入し、グループの成長を加速させています。また当社は、国内で最もモバイルバッテリーを販売した会社として10年連続で表彰いただいています。そして、その知見を活かしながら、災害時や停電時に役立つような「ポータブル電源」の活用を様々なニーズの場面で提案しています。

エレコムグループはパーパス、企業の目的「Better being」を定めました。エレコムグループの存在意義を示すもので、葉田創業者が創業以来、ずっと当社の根底として歩んできました。「より良き製品・サービス、そして会社、より良き社会を追求し続ける」という本質的な姿勢を、ステークホルダーの皆様や全ての皆様に共有したいと考え、制定に至りました。

「Better being」の企業目的に基づき、より良き社会となることを目指し、社会貢献活動にも力を入れて取り組んでいます。今年4月には、「そこで育ったことを誇りに思えるような児童養護施設」を作りたいという、創業者の葉田順治の想いからプロジェクトがスタートし、世界的に著名な建築家である隈研吾さんに設計いただいた児童養護施設「東紀州こどもの園」が三重県熊野市に開所しました。当社としても、社会や地域の貢献活動の一環として一部寄付をさせていただいております。7月には、当社が所有する研修施設「レクター葉山湘南国際村」を、災害時に避難所として活用いただくため、葉山町と「災害時における施設等の利用に関する協定」を締結しました。当社は、「社会との共生」を1986年の創業時から経営の根底と捉えています。

当社が所有している研修施設「レクター葉山湘南国際村」が、横須賀市にもまたがっていることからご縁が生まれ、地域の一員として当社ができることはないかとお相談した結果、今回の締結に至りました。昨今はスマートフォンや携帯電話が避難時には欠かせないツールです。そこで、当社が強みとしているデジタルデバイスの充電に関連する製品をご提供することが、今できる支援活動として、地域に貢献できることだと考えています。また、監視カメラやヘルスケア関連製品などを活用し、避難所のDX化、防犯・防災における避難所生活の環境改善など、お役に立てる提案をできることが多々あると考えております。

地域への支援活動と並行し、防災に関する実証実験も検討していきたいと考えています。例えば、横須賀市は急斜面や高台が多い地域と聞いております。そのため、土砂崩れなどの災害発生時には、職員の方々が現地調査をされることがあるかと思ひます。職員の皆様の作業負荷を低減するため、遠隔地の映像を事務所と共有することができる「ウェアラブル対応 WEB カメラ」の活用などを想定しています。今回の締結を契機に、住民、職員の方々と現状と課題についてお話をさせていただき、お役に立つソリューションや製品の開発などに協力させていただきたいと思ひます。

当社は今後、日本市場のみならず、グローバル市場への展開も加速する中で、さらなる事業拡大を図ります。また、近年大きな注目を集めるAIの活用など、新たなDX分野へのチャレンジを続ける

ことで、エレコムグループの継続的な成長と新たな飛躍を目指したいと考えています。
本日はお忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。皆様の不断のご支援に心より感謝申し上げます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。以上となります。

(協定書の調印)

■質疑応答

記者

今回の協定内容に、端末使用等の指導員の派遣とあります。今後、講習会や、避難所のDX化を進めるための勉強会や検討会の開催など、具体的なイメージがあったら教えてください。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

単にDX化というと、ツール、例えばカメラなどの製品の話になりがちですが、それをどう活用していくかということについて、まさに横須賀市さんと話し合いを重ねる中で、勉強会、研修会を作りたいと思います。現状の課題とそれに対する対策などを話し合いながら、最終的には使ってもらえるよう一緒に取り組んでいきたいと思っています。

記者

ありがとうございます。もし、今後、研修会などありましたら、可能でしたら、報道公開などもご検討いただけるとありがたいです。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

はい。よろしく申し上げます。

記者

協定の内容が、災害時のバッテリーやモバイル充電器の提供ということで、市側にとってはすごくありがたい内容かなと思います。双方、初めてのこういった内容の協定締結とのことでしたが、今回、なぜ、横須賀市でこのような協定が実現したのか教えてください。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

先日、当社が所有する研修施設「レクトーレ葉山湘南国際村」を見ていただきたいということで、上地市長にお越しいただきました。「レクトーレ葉山湘南国際村」は横須賀市の一部でもあります。そこで、弊社会長の葉田が、市長とお話をさせていただく中で、一緒に社会貢献に歩んでいきたいという話が出ました。それを具体化して形にするのが、今回の協定です。
北陸の能登半島地震が発生したときは、弊社は、いち早く社会貢献としてバッテリーをお送りしました。そのようなお話をする中で、いま「防災」がいろいろなところで話題になっており、避難所で2日間スマートフォンが使用出来たら、いろいろな情報伝達ができるということもありますので、そこを一緒に取り組んでいくということが出てきて、スタートする形になっています。

市長

葉田会長と研修施設でお会いしました。

経緯としては、NTT 東日本の渋谷社長とよく連携をさせていただいているのですが、渋谷社長から、「葉田会長と馬が合うのではないか」というお話をいただいて、懇親会を開きました。

葉田会長は、ものすごくエキサイティングで、ものすごく前向きな方で、こんな人がいたのかと思うくらいの方で、意気投合しました。話の流れから、何か連携できないか、社会貢献できないかと、とんとん拍子に話が進み、事務方で具体的に何ができるかを考えて、今日に至りました。葉田会長

とのご縁から始まったとご理解いただければと思います。

記者

エレコムさんは、横須賀市内に大きな事業所や拠点を構えているということではないのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

今のところは、「レクトーレ葉山湘南国際村」という研修所を構えているというところです。

記者

協定の内容としては、他の自治体も非常に興味を示すのではないかと思います。他の自治体から同様の要望があった場合、御社はどのように対応しますか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

社会貢献ですので、進めていきたいと思います。

記者

市長から、今後、児童養護施設への支援も想定されているとのお話があったかと思います。具体的にはどういうことをイメージされているのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

東紀州の子どもたちもそうですが、これから未来を創っていく子どもたちに対して、例えばエレコムの研修所に来ていただいて、見学や宿泊していただいたり、食事を提供させていただいたり、何かプログラムを考えて時間を使っていたり、ということを考えています。その中で、横須賀市様と一緒にやっていけたらと考えており、現在、企画・計画をしております。

記者

今回の協定の中には明記されていないけれども、横須賀市と一緒に取り組んでいくということによっていでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

はい。ご一緒させていただければと思います。

記者

協定の中では、まずは災害時の電源の確保が、最初に挙げられております。この電源を供給する際の災害規模は設定されているのでしょうか。例えば、比較的小規模な災害であれば、一部の地域で避難所が開設されているという状況もあるでしょうし、規模によっては市内全域で避難所が開設されているということもあると思います。

また、あわせて、市内の避難所数と最大避難者人数、更に、ポータブル電源とモバイルバッテリーは最大でどのくらいの数が提供可能なのか教えてください。

市長室長

災害規模や被害状況は特に設定しておりません。いろいろな状況があると思いますが、インフラに被害が出て、電気が来ないという状況の時には、お願いしようと考えております。

避難所の数は69か所、防災計画上の避難者数は6万人を想定しています。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

携帯電話が2日間持つくらいの容量のポータブルのものもあれば、500ワット、1,000ワットというように大容量のものもあります。数量については、これから横須賀市様のニーズや計画を元に、対応していきたいと考えています。

エレコムとしては、ポータブル電源、バッテリーは強化していきたいと考えています。今はリチウムのバッテリーですが、燃えてしまうといった事象もあり、ナトリウムのバッテリーを再来月くらいに出す予定で取り組んでいます。どんどん大容量のものを作っています。製品を進化させながら、横須賀市さんと例えば「避難所にはこれくらいずつ必要」など、話し合いながら、これから決めていきたいと思います。

記者

ナトリウムだと性能が落ちるといったことはないのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

電力量の出が少し落ちます。ただ、燃えるリスクが減り、また電力自体の安全性はかなり上がります。そのような製品と両面で作っていかうと考えています。

記者

提供という言葉が使われていますが、寄附でよろしいのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

まず寄附をさせていただきます。その後、リニューアルさせていただくなど、横須賀市さんと話し合いながら考えていきたいと思います。バッテリーだと5年から6年で劣化してしまうことが多いので、リニューアルをかけていかななくてはならないと思います。災害もいつ起こるか分かりませんので、あるレベルの在庫が必要であろうと考えています。そのスキームについては、これから横須賀市さんと話し合いをして形を作っていきたいと思います。

記者

寄附は大体どれくらいの個数を想定されていますか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

これから計算します。

記者

まずは寄附をして、在庫が劣化した場合はリニューアルをする。その際は有償になるという理解でよろしいでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

私どもとしては、まず寄附をさせていただいて、その規模でテストをしていただきながら、その後、どのように進めていくのかという話し合いをさせていただきたいと思います。

記者

改めて、お伺いしますが、リニューアルの際は有償なのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

これからの話し合いになります。

記者

資料には、能登半島地震でモバイルバッテリーを 2,000 台寄附したとあります。横須賀市に、何ほどのくらい寄附するのか、その後、どう対応するかというシミュレーションみたいなものを教えていただけますか。

市長

防災体制をどう構築していくか、被害状況や被害エリアをどう設定していくか、まずは横須賀市が考えなくてはなりません。その中で、こういうものが足りなくなった場合、どうにかして調達したいと考えていた時に、エレコムさんのお話がありました。エレコムさんから、このくらい提供しましょうという話ではなく、様々な被害状況が想定される中で、はじめはエレコムさんが無償で提供してくれる、その始まりだにご理解いただければと思います。その後、リニューアルなどで、何千台、何万台となった時には、市から、費用をお支払いしなければならないと思います。三浦半島全域に及ぶような被害が出た時など、そういう想定を具体的にやらなければ先に進まない話だと思います。

記者

まだ検討段階とのことですが、寄附というのは、市に備蓄として保管しておくのか、それとも災害時にエレコムさんが輸送するという形になるのか、そういったスキームについてもこれから検討されるのでしょうか。

市長

バッテリーは維持管理が必要だと思います。おそらく、発災時に、エレコムさんから輸送していただく形になるかと思っています。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

いろいろな考え方があろうかともいます。一定の量は持つておくということもあるでしょう。そのあたりは話し合っていて考えていきたいと思っています。

記者

能登半島地震でバッテリーを寄附した際は、どういう状況、どんなスキームだったのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

とにかく送る、ということでした。被災して困っている方がいると考えたときに、会長の葉田が、すぐ送るようにという形で対応しました。

記者

能登半島地震の時は、1月の何日ごろに届けることができたのでしょうか。

エレコム株式会社 人事総務部東京総務課長

実績は後ほど回答（※）いたします。

能登半島地震の際は、県に申し入れをいたしました。私ども以外の物資も基本的にはすぐに送っていただいても対応できないとのこと公表されておりましたので、申し入れをして、先方から受付をしますというタイミングで、エレコムからバッテリー2,000 台をお送りしました。

（※）バッテリーを送った日は 2024 年 1 月 13 日

記者

ちなみに、能登半島地震の際に送ったバッテリーは、金額にすると何円相当だったのでしょうか。

エレコム株式会社 人事総務部東京総務課長

後ほど回答（※）します。

（※）金額に換算すると 7,760,000 円（店頭実勢価格・税込）

記者

他の自治体とこの種のパートナーシップ協定は、結んでいないということによろしいのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

いろいろとお話がありますが、まだ結んでいません。

記者

モバイルバッテリーは、基本的に一家に一台というイメージなのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

いえ、一人に一台です。大容量のポータブル電源は、一家に一台というイメージです。

記者

防犯カメラは、避難所が開設された後に設置するというのでしょうか。

エレコム株式会社 石見 代表取締役社長執行役員

そうです。

2 日本最高峰のパークール大会「PARKOUR TOP OF JAPAN YOKOSUKA 2024」開催について

～冒頭、大会プロモーション動画を放映～

市長

ご覧いただいた、昨年度、横須賀で開催いただいた、記念すべきパークールの第1回大会は大盛況で、ぜひとも引き続き開催を、とのお声をたくさん頂戴しておりました。こうした中、今年も、ここアーバンスポーツのまち、横須賀をパークールの全国大会の開催地として選んでいただいたこと、大変光栄に、そして嬉しく思います。今回の大会では、世界初の試みとして、スピードラン、フリースタイル、チェイスタグの3種目が同時開催となり、昨年より規模を拡大して開催していただくと伺っておりますので、昨年、間近で拝見した私自身も、大変わくわくして、期待をしているところです。

また、大会に先駆けて、吉田委員長には、皆様により広く、より深く、パークールの本質を知っていただくために、今回はじめて小学校への学校訪問や、市内の商業施設におけるパークール体験会及びデモンストレーションの開催にも協力をしていただきました。先日行った、日本トップクラスのパークールアスリートによる小学校訪問では、子どもたちが「バランスをとる」・「走る」・「跳ねる」などのパークールの基本動作を見て学ぶことで、競技の迫力や面白さだけでなく、身体の使い方や体幹の重要さなどを知ってもらうきっかけになったと聞いています。この小学校訪問を通じて、多様なスポーツの選択肢の一つとして、パークールに触れてもらうとともに、ほかのスポーツの基礎にもなるパークールを知ることで、子どもたちには、様々なことにチャレンジしてほしいと願っています。また、予定していた、「体験会とデモンストレーション」は、残念ながら雨により中止となりましたが、前日から当日にかけて、実施について想像をはるかに上回る多数のお問い合わせをいただいたと報告を受けており、新たなスポーツへの興味や、横須賀市が推進するアーバンスポーツへの理解と関心が深まってきていると思います。

大会の詳細は、後ほど吉田委員長から、ご説明いただきますが、このような普及も含めたアーバンスポーツの推進は、まちの活性化や、横須賀のブランドイメージの向上、そして、何より子どもたちのスポーツへの興味関心につながるものと確信しています。今後の展開にも期待しています。

改めまして、吉田委員長をはじめとする主催者及び関係者の皆様、この度の横須賀での開催に、心より感謝申し上げます。今後も横須賀市は、多くの市民の皆様と共に、この素晴らしい文化を育み、根付かせていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。私からは以上です。

東京都体操協会理事 東京都体操協会パークール委員会 吉田委員長（以下、「吉田委員長」）

皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただき、ありがとうございます。

今、ご紹介にあずかりました東京都体操協会理事 東京都体操協会パークール委員会委員長を務めます吉田宏と申します。どうぞよろしく願いいたします。

去年もちょうど今頃に、記者会見をして、10月下旬に三笠公園で大会を開催しました。今年は2年連続、2回目となります。私が一番求めているのは、横須賀市は「アーバンスポーツのまち」とうたっており、その大きなコンテンツの一つとして、横須賀市にパークールを根付かせていくという事です。1年で終わりにするというのではなく、「ぜひ今年も」と、横須賀市の皆さん、市役所の皆さんにいろいろとご尽力をいただいて、2年連続の開催に至りました。本当に感謝しております。

私どもは、東京都体操協会という団体です。皆さんご存知かどうか分かりませんが、「パークール」というコンテンツ自体は体操種目に加わってはいますが、まだ全国の都道府県の体操協会には「パークール委員会」はなく、私ども東京都体操協会にしか「パークール委員会」はありません。そのような中であっても、いま一番パークールに力を入れていただいているのは、東京都の枠を越えて、神奈川県横須賀市です。

先ほど、市長のお話にもありましたが、今週の月曜日と昨日、森崎小学校と鶴久保小学校を訪問いたしました。そこでパルクールの講演会とパルクール教室を2時間実施してきました。小学校でオフィシャルの会を実施することは初めてだったのですが、子どもたちの反応が非常に良く、ぜひパルクールをやりたい、パルクールを見に行きたいという子どもたちがたくさんいて、非常に驚きました。先ほど、市長にお伝えしましたが、この横須賀市の子どもたちが、非常に良いと感じています。聞く態度もできているし、反応が非常に良かったです。横須賀市の教育が進んでいる事に、非常に感心しています。また、子どもたちは、みんなパルクールの事を知っています。「パルクールを知っている人？」と聞くと、かなりの人数が知っていて、本当に驚きました。10月26日は、三笠公園に子どもたちがたくさん来てくれると思います。非常に楽しみです。

さて、今回2回目となる大会について、簡単にざっくり説明いたします。まず、私の紹介です。私はもともと体操協会にいたのではなく、ずっとスノーボード業界にいました。スノーボードのオリンピックに出るような選手を今まで8名ほど育てました。そのような中でアクションスポーツ、アーバンスポーツを発展させようと思い、約6年前からパルクールをぜひ横須賀で、と騒いでいて、いよいよ実現したという経緯になります。

ここにいらっしゃる皆さんは、パルクールがどういうものかをご理解いただいていると思いますので詳細は割愛いたしますが、パルクールはまず、アクロバットではないということ、もう一度申しておきます。元々はフランスの軍隊が発祥で、A地点からB地点にいかにか安全に移動するかという、移動するための移動術が元々のパルクールです。

パルクールはフランス発祥です。「ル パルクール」、つまり“路”という意味です。自分たちで路を切り開いていきましょう、という哲学にもあるようなコンテンツになっています。普通のアクロバット競技ではない、また、安全に行っていく、ということが重要な点です。

そして、パルクールに関しては、スポーツではありますが、リハビリという側面もあります。高齢者の方々に、安全に歩行していただくためのシニアパルクールというトレーニングシステムもあります。今年から、横須賀市さんと一緒にパルクールで予防医学ということで、いろいろと取り組みをさせていただいています。幼児からシニアの方まで、非常に幅広い方を対象に、みんなで練習して、体を健康にしていこうということもその本質の一つです。

競技としては、私どもの上部団体である国際体操連盟は、7年ほど前から、パルクールを体操種目に追加するという取り組みをしています。体操種目は、器械体操、トランポリン、新体操と三つありますが、パルクールは四つ目の体操種目としてオリンピック種目を目指しています。まだ決定はしていませんが、早ければ4年後のロサンゼルスでオリンピック種目にと期待されています。ワールドカップは毎年行われていまして、世界選手権も今年11月に北九州で第2回が行われ、競技としても徐々に発展しています。そのパルクールを、横須賀から発信していこうと取り組んでいます。パルクールというコンテンツは、非常にメディア受けが良く、様々なメディアに取りあげられています。見ているだけでも楽しく、かっこいい。昨年よりインターネットでライブ中継をしており、今年の大会は、毎日放送系のGAORAさんというスポーツチャンネルと組みまして、GAORAさんのYouTubeでライブ中継を行う予定になっています。それ以外にもいろいろなメディアさんに来ていただいて、スポーツニュースで取りあげてもらえればと考えています。YouTubeではかなりの人数が見ているという実績があります。

今まで、私ども東京都体操協会は、ずっと長くこの大会を全国で開催しています。2021年には兵庫県淡路島、2022年には東京駅前の大手町で大会を行いました。そして、昨年横須賀で開催しています。年に1回の日本一決定戦というかなり大きな規模の大会です。いよいよそれが横須賀の地に根付いてきたと思います。今までいろいろな場所で大会を開催してきましたが、横須賀の三笠公園は非常に良いロケーションです。これからも10年、20年と定番化し、大会、イベントを実施していきたいと思います。

今年の大会について、お話しすると、先ほど市長もおっしゃっていましたが、世界初3種目を1日で行います。パルクールにはいろいろな種目があり、一番有名なのはスピード競技とフリースタイ

ル競技の二つです。これに加えてもう一つ、チェイスタグという、いわばパルクールでの追っかけっこ、鬼ごっこのような、1対1でどちらが先に捕まえるか、どちらが逃げ切れるかという種目があります。今年はその実施します。日本では、今までほとんどプロの大会で開催された事はありません。初めて見る人が多いと思いますが、非常に分かりやすい試合形式なので、面白いと思います。この3種目を同時にやることは、世界でも今まで聞いたことがありません。この横須賀大会が初めてという事になります。ぜひ、期待していただきたいです。

今回は、スピードランに女子6名、男子が12名、フリースタイルに女子8名、男子14名、チェイスタグはトーナメント制で、男子のみ16名の選手が出場します。

日本の本当のトップだけを呼んでいます。こういう言い方をここでして良いのかどうか分からないのですが、日本選手権に出ていない強い選手も出場するので、日本選手権よりも真の日本一を決定する大会とも言えます。ご期待ください。

私は、もう十数年前から、この横須賀市という場所は良いなと思っていました。横須賀市からアクションスポーツ、今で言うアーバンスポーツをもっともっと発信していく事で、横須賀市の地方創生になるのではないかと、10年以上前から、商工会議所や市に提案させていただいておりました。スケートボードやBMX、いろいろなものを進めていったら良いですよという話の中から、どんどん発展してきて、いよいよパルクールとなりました。横須賀市は、若者を取り入れていくコンテンツに非常に前向きです。私は、いろいろな県とお付き合いをしていますが、それと比べても、横須賀市は、聞く耳も持っていますし、バックアップ体制ができています。ぜひ、横須賀市で一つのモデルケースを作って、アクションスポーツ、アーバンスポーツでもっと若者を活性化していこう、ファミリーにもっと移り住んでもらおうということを考えていけたら良いと思っています。

いずれは、大会だけではなく、横須賀市にパルクールができるパルクール公園、または、パルクールがトレーニングできるパルクールジムの誘致もできたら非常に良いのではないかと考えています。今回の大会のゲストは、今日も来ていただいています。まず、私ども東京都体操協会パルクール委員会の顧問である、皆さんご存知、池谷直樹さんです。池谷顧問は、モンスターボックスほか、サムライロックオーケストラなどいろいろな活動をしていただきながら、パルクールという新しいコンテンツのオピニオンリーダーとして手伝っていただいています。ありがとうございます。

そして、今日、私の横にいるのは Soala さんです。Soala さんは第1回大会、東京大会よりも前からシンガーソングライターとして活躍していますが、パルクールという題材で、パルクールのテーマ曲を世界で初めて作詞・作曲して歌っていただいています。今回も大会当日に来ていただいて、Soala さんの作ったパルクールのテーマ曲「Glorious」を歌っていただきます。

そしてもう一人が、小泉孝太郎さんです。小泉さんは、ご存知のとおり横須賀市出身です。パルクールを実際に見て、触れていただいて、横須賀市を盛り上げていく、パルクールを横須賀に広めていけるようお願いできればと思いました。私自身、小泉さんがゲストに来られることを楽しみにしています。Soala さんが歌います。大会をライブ配信します。キッチンカーが出ます。ポートマーケットさんのご協力で店内のビジョンにもライブ中継が流れます。また、三笠公園の記念艦三笠の入艦料が割引になるなどのクーポンも配ります。まち、地域ぐるみで大会をバックアップしていただいている、市民の方々にも喜んでいただければと思っています。

今回の出場選手は、本当に日本のトップ選手が来ます。今日その中から代表して2名の選手にゲストとして来ていただいています。一人目は、STRUGGLE 所属の上原貴博選手。沖縄県出身の25歳です。非常に繊細な技を繰り出します。先ほどのプロモーションビデオの最初に出ていましたが、タクトリプルフルという、世界で誰もやった事がない逆足で踏みきって3回転する技を、今年の横須賀大会で、世界で初めて成功させ、3位に入賞しました。今年は、ぜひ優勝と意気込んでいます。もう一人、TOKIO インカラミ所属の大貫海斗選手です。パルクール界で「ミスターパルクール」と言われています。非常に難易度が高い技やオリジナルトリックで魅了します。今年の大会では、最後にケガをしてしまいましたが、リベンジすると意気込んでおります。今年、大貫選手は、国内の大会に7試合出ていますが、全て負けておらず7試合全勝です。上原選手、大貫選手には、この後

ちょっとしたパフォーマンスを皆様にご覧いただきたいと思います。ぜひ期待してください。以上になります。

～選手パフォーマンス～

■東京都体操協会パルクール委員会 池谷顧問（以下、「池谷顧問」）のご挨拶

池谷顧問

ただ今、ご紹介にあずかりました池谷直樹です。パルクール委員会の顧問を務めており、昨年の上野公園の大会にも出席しました。私は体操をやっておりましたが、一般の方の代表として、一般の方がパルクールを見たときに、どのような気持ちで見ているかという視点で解説をするなどの役割をしております。

いま、2人の演技を見ていただいたように、パルクールでは宙返りやひねりなどをします。以前は、私も宙返りやひねりなどができたので、私自身が驚くことはありませんが、パルクールは体操とは少し違っているところがあります。パルクールには、パルクールの基本があって、体操とは違うところからスタートしています。今年がオリンピックがありました。体操はマットやいろいろな器具を使って演技をしますが、パルクールは、固いコンクリートの上に着地します。体操選手からすると本当にすごいと言いますか、どうやっているのだろうと思うくらいです。そのくらいパルクールと体操は違いがあります。

パルクールの良い点をお話ししますと、体操は体育館を建てるのに何億円も費用がかかります。また、体操の器具、例えば、皆さんがオリンピックで見る床運動の床のフロアを全部買ったなら、床だけで3,000万円くらいかかります。体操の器具を全部揃えようとする、何千万というお金が必要になります。ただ、パルクールは公園の遊具など、自然の中にあるもので練習できます。そのような意味で、パルクールは手に取りやすい、始めやすいと思います。ぜひ、横須賀でどんどん広めていって、パルクールと言えば横須賀と、みんながこの横須賀に移り住んでくるようなまちにできたらと思っています。10月26日も楽しみにしてください。よろしく願いいたします。

■池谷顧問から、出場選手へのインタビュー

池谷顧問

（パフォーマンスを終えた選手に対して）だいぶ息は整いましたか。まず意気込みをお願いします。

パルクールアスリート 上原貴博選手

ご紹介にあずかりました上原貴博と申します。前回の横須賀の大会では、先ほど紹介していただいたとおり、私の中でも初めての技で、世界的にも珍しいタックトリプルという技をやらせていただきました。今年も新しい別の技をできるように、今、練習に取り組んでいます。その技を成功させて、大貫選手に勝って、大貫選手の連勝を止めることができるように頑張ろうと思います。よろしくをお願いします。

池谷顧問

大貫選手はどうか。

パルクールアスリート 大貫海斗選手

先ほどご紹介にあずかりました、パルクールアスリートの大貫海斗です。昨年に引き続き、またこのような場所に呼んでいただき、本当にありがとうございます。去年、私は大会のラン中に失敗して、救急車で運ばれてしまいました。その節は本当に大変ご迷惑をおかけしました。

池谷顧問

大トリでね。

パルクールアスリート 大貫海斗選手

今年はそれを取り返すことができるように、横須賀大会では、そのケガがあってこそ今の自分だと見せることができれば良いと思います。今年は日本で開催される大会を全部勝ちます。よろしくお願いします。

池谷顧問

(上原選手に対して) 優勝するのね。

パルクールアスリート 上原貴博選手

そうですね。優勝しか見えてないです。

池谷顧問

(大貫選手に対して) 優勝するのね。

パルクールアスリート 大貫海斗選手

当たり前です。

池谷顧問

なるほど。では、もう2人優勝で良いですかね。

ほかにもたくさん有力な選手が出場します。この横須賀大会、2人を含めて選手たちが大いに盛りあげてくれると思います。ぜひ皆さん、よろしくお願いいたします。

■シンガーソングライター Soala さん (大会テーマ曲の作詞・作曲・歌唱) のコメント

吉田委員長

自己紹介をしてください。

シンガーソングライター Soala さん

シンガーソングライターの Soala と申します。よろしくお願いいたします。

吉田委員長

まさか Soala さんと、こんなところでこんなことをするようになるとは、私は夢にも思いませんでした。皆さん Soala さんを調べていただければ、今でこそ、とんでもないフォロワー数で、とんでもないミュージシャンになったということがお分かりになると思います。ちょうど3年前の今ごろ、たまたま出会いました。その頃、選手たちの後押しにもなるし、私はパルクールには絶対テーマ曲があった方がいいと思っていました。まだ世界中探してもパルクールのテーマ曲が無かったので、誰かにパルクールのテーマ曲を作ってもらいたいなと思っていたところ、たまたま3年前の今ごろ、Soala さんと出会いました。「私はプロのミュージシャン、シンガーソングライターを目指しています」と話していました。その時に、私が「パルクールのテーマ曲を作りたい」と言ったところ、言った瞬間に「私にやらせてください」と言われました。私は今でも初めて会ったときのことをよく覚えています。その後、本当にすごい曲を作ってきてくれて、とてもびっくりしました。そこから、Soala さんのストーリーがどんどん始まっていったと感じています。Soala さん、このパルクールのテーマ曲である「Glorious」のことも含めて、そのあたりのところはどうでしょうか。

シンガーソングライター Soala さん

吉田委員長との出会いのきっかけは、本当に些細なことが始まりでした。そのころ、私はまだ無名でしたので、吉田委員長との出会いがすごく運命的に思えました。

私は、吉田委員長と出会ってから、パルクールというスポーツを知ったのですが、その魅力にとっても惹かれました。はじめてパルクールを見たときに、すごくインスピレーションが湧いて、刺激を受けて、この「Glorious」という楽曲が生まれました。個人競技なのですが、ライバルでありつつも、仲間を応援して、リスペクトして、励ましあったり、喜びあったりしている姿にとっても刺激を受けました。私も何か力になれることがないかなと思い、「Glorious」という曲を書き下ろしたので、本番でも選手の皆さんの力になれるように、私も全力で魂を込めて歌わせていただきます。選手の皆さんを心から応援しております。本番もよろしく願いいたします。

吉田委員長

この「Glorious」という曲は、Soala さんのミュージシャン人生を全て変えた記念の曲ですよ。

シンガーソングライター Soala さん

そうですね。

吉田委員長

韓国系のアイドル系でいくのかな、とも思っていました。ただ、本人はもっとロックな、もっと人に訴えかけるような歌を歌いたいという思いがあり、そのようなジレンマの時に、たまたまパルクールの話があり、そこから、いろいろ変わっていききましたよね。

シンガーソングライター Soala さん

過去にお世話になっていた事務所さん、プロダクションさんには、韓国路線に進んだ方が、というお話がありました。私がやりたい音楽よりも、売れる路線に進めていた時期がありました。その当時、私は、私のやりたい音楽をやりたいけれども、一步、踏み出せない自分がいる、という状況でした。そんな時にパルクールに出会い、私が本当にやりたかった音楽の方向性を導いてくれたというか、パルクールをきっかけに、私の伝えたかった音楽が明らかになったというか、そこから私の音楽性がはっきりして行って、人に伝える音楽、響かせる音楽を、自分らしく書けるようになったなと思います。

吉田委員長

おそらく、今後も、この曲はパルクールのテーマ曲として君臨していくと思います。今回の大会でも、Soala さんが歌います。Soala さんの歌を聴きたくて横須賀市に足を運ぶ人もたくさんいると思います。そういったファンの方々に向けて何かメッセージはありますか。

シンガーソングライター Soala さん

パルクールは、私が無名の時から歌わせていただいた場でもあり、私にとっては大切な場所です。そういった場所に、私のファンの方が足を運んでくださるっていうのはすごく感慨深いです。また、そこで、初めて Soala のことを知る方もたくさんいらっしゃると思うので、パルクールの良さと、そして Soala の歌で、また更にパルクールを盛りあげていこうという気持ちで、本番も歌わせていただきます。

吉田委員長

楽しみにしています。去年は Soala さんには、歌っていただいただけだったのですが、今年は歌っ

ていただいて、そしてゲスト席、放送席に入ってください、実際に選手たちの演技を見てもらい、Soala さんからのいろいろなコメントももらいながら進めていきたいと思います。

シンガーソングライター Soala さん

はい。よろしくお願ひいたします。

吉田委員長

Soala さんのパルクールテーマ曲「Glorious」の生ライブ、なかなか聴けません。10月26日、本番に、ぜひお越しください。それでは、Soala さんありがとうございます。

シンガーソングライター Soala さん

ありがとうございました。

■質疑応答

記者

先ほど、横須賀で開催する理由を3点ほどご説明いただきました。これらのほかに、地理的な要因、あるいは環境的なもの、例えばパルクールができる遊具がある公園やスペースが多いであるとか、首都圏に近い、などございましたら、お伺いできればと思います。

吉田委員長

私は岩手県出身ですが、岩手にいても横須賀という名前は、行ったことがなくても、子どもの頃から知っていました。ネームバリューがあると思います。また、首都圏からの交通アクセスが非常に良いと考えています。京浜急行、JR が運行していますし、高速道路も通っています。昔から行ったことがなくても誰でも知っているまちという印象がありました。ぜひこの横須賀の地にアーバンスポーツ、今回で言うとパルクールという新しい文化を持ち込み、そこから全国に発信していきたい。ベストな地の利があるという印象です。今、横須賀にパルクールをするための器具があるということではないのですが、海があり、山があり、陸もある。全て揃っていて、パルクールができる公園やジムが建設できる土地もあります。横須賀というネームバリュー、交通アクセスの良さ、地の利という理由で、ずっと以前から、横須賀でパルクールの大会を開催したいとお願ひしております、昨年から実現しました。

記者

「真の日本一を争う」とのことでした。いわゆる「公式戦」などの定義があるのでしょうか。それとも、単純に大会がいくつもあり、その中の一つとして開催されるということなのでしょうか。

吉田委員長

以前、スノーボードでも同じようなことがありました。スノーボードがオリンピック種目になる前に、スノーボードの協会というものが全世界にあり、大会などを開催していました。その後、国際スキー連盟がスノーボードをスキー種目に入れることになり、スノーボードは、オリンピック種目になって、今に至ります。どちらがオフィシャルということはありません。しかし、「スノーボードはスキーなのか」と聞かれれば、「違います」となる、ということが、以前はありました。パルクールはパルクールで、移動術をトレーニングするという文化は、かなり前からありますが、その中で、「誰が一番すごい移動をするのだろうか」という問いが発展して競技となっていったというのが一つの流れです。そしてどこの協会が、どこの団体がというものがいないところに、7年前から国際体操連盟が新しい体操種目にしようということで、今、ワールドカップ、国際大会ほか

様々な大会を開催しています。日本では日本体操協会が日本選手権を行い、日本選手権で上位に入ること、ワールドカップ、世界選手権の日本代表、ひいては、オリンピック種目になればオリンピック代表に選ばれるということになります。しかしこれがオフィシャルということでもありません。プレーしている人、選手たちの感覚によるところが大きいと思います。一概に、これが全てだという時代ではなくなってきました。私は東京都体操協会という76年の歴史のある協会の理事を務めながら、パルクールという新しいコンテンツを、これから普及発展させていこうと取り組んでいます。なぜ、「真の日本一」や「日本一決定戦」と言っているかということ、例えば日本体操協会が行う日本選手権に出るためには、日本体操協会に競技者登録をして、その登録した人でないと予選会に出ることができないという規定があります。しかし、全国には真剣にパルクールに取り組んでいる方がたくさんいますが、なかなかそのような情報が行き渡らない。また、中には、「パルクールは体操ではない」と考えているトップの選手もいます。したがって、日本体操協会が行う日本選手権に、全ての選手が出ているわけではありません。まだ発展途上と言えます。そのような状況ということもあり、インスタグラムやTikTokなどのSNSでの練習やプレーの発信を見て、私から声をかけて、日本体操協会に選手登録していない方、情報が行き渡っていない方にコンタクトを取っています。パルクールは、勝ち負けというだけではなく、いろいろなスタイルがあり、本当に自由な競技です。こうでなければならないというものもありません。いろいろなタイプの人たちを実際に見てもらいたいと思います。例えば、フリースタイルは採点競技です。しかし、みんなが同じことをして、ミスをせずに点をあげて勝つ、負けるということだと面白くありません。選手みんながいろいろなスタイルを出し、それを見たファンの方々が感動し、その選手のファンができるということは、非常に重要なことだと思います。競技団体について、どこがオフィシャルであるということが、イメージとして固まる前に、いろいろなことを実験していきたいと考えています。その大きな実験の一つがまさに横須賀大会です。現状は、ほぼフリースタイルの大会です。スピード種目の大会や、ましてや、チェイスタグの大会は、日本では、聞いたことがありません。そういったことにどんどん挑戦していきたい。パルクールには、いろいろな角度で、いろいろな見せ方、プレースタイルがあることを見せていきたい。横須賀市さんには、それを受け入れていただいて、非常に感謝しております。団体については、現状、どこがオフィシャルでどこが非オフィシャルということはないと申しあげておきます。以上です。

記者

今回は、世界初の3種目の実施とのことですが、去年は何がなかったのでしょうか。

吉田委員長

去年はエキシビションで、スキルという規定演技のようなものを最後にやろうと思っていました。しかし時間的に暗くなってきたということもあって、それができませんでした。子どもたちの間では、全国的にチェイスタグ、日本語でいうと「パルクール追っかけっこ」的なものが非常に流行ってきています。いろいろな障害物を乗り越えて追っかけっこし合う、鬼ごっこし合うというものです。パルクールの導入の最初の入口として、非常に分かりやすい種目です。実際に、チェイスタグという種目で、今年の春、イギリスでも実施されましたが、世界大会も開催されています。子どもたちが入口として入りやすい、分かりやすいものを、トッププロがやったらどうなるかを見せたいと考えています。

記者

そうしましたら、今回、チェイスタグが初めてということでしょうか。

吉田委員長

そうです。

記者

今おっしゃったように、「障害物を乗り越えて追っかけっこする」という枕詞があると、すごく分かりやすいのですが、フリースタイルとスピードについて、枕詞使って簡単に言うと、どんなふうに説明できるでしょうか。例えばフリースタイルは、壁や鉄棒を使ってアクロバティックなパフォーマンスを披露するとかなどがあると思いますがいかがでしょう。

パルクールアスリート 大貫海斗選手

フリースタイルは採点種目、スピードはタイムを競う種目です。スピードは障害物競走みたいな感覚です。いわゆる障害物競走よりもレベルアップした、より大きい規模の障害物を乗り越えていく種目です。パルクールは、より安全に移動するという軍隊のトレーニングが発祥ですので、スピードは、よりパルクールの本質に近いかなと思います。フリースタイルはそこから進化して、アクロバットと移動が融合して、近年それを使って演技して、自分なりのオリジナルトリックを入れ、自分の個性を見せつけるという種目かなと思います。

記者

さきほど、パフォーマンスで見せていただいたものがフリースタイルでしょうか。

パルクールアスリート 大貫海斗選手

フリースタイルです。

記者

パルクールの三つの柱として「基礎体力」、「スポーツ競技」、「健康／リハビリ」を挙げられています。この「スポーツ競技」がメインだとは思いますが、「基礎体力」や「健康／リハビリ」をアピールする場面は、この大会ではありますでしょうか。

吉田委員長

この大会は、日本のトップレベルの選手はここまでできる、ここまでの移動ができるということを見せることを目的と考えています。それが、憧れにもつながっていくと思います。ただ、パルクールは幼児から高齢者、シニアの方まで誰でもできるというところまで、掘り下げていきたいと思っています。しかし、まずは分かりやすいところを見せていきたいと思っています。スピード競技は究極の空間移動です。こんなにすごい究極の空間移動ができるということをタイムで争います。フリースタイルは、大貫選手が言ったように個性です。個々の個性を見せていく。回転技や、ビッグジャンプを入れて、自分の個性を出して、その個性の評価を採点で表します。

3 案件以外の質疑応答

記者

先日、報道されたところで、教科書採択に関する教育委員会会議の音声データについて、情報開示請求したところ、多額の手数料を徴収されたとのことで、これについて、オンブズマンが地裁に訴訟を起こしたとのことでした。現在、市民団体から高額な手数料の納付ということで提訴されている状況だと思います。これに対して、市としてはどのように対応していくのでしょうか。例えば、これを機に情報開示にかかる手数料のあり方について考えるなど、現時点で何かあればお答えいただけますでしょうか。

市長

現時点では、訴状が届いていないのでコメントは差し控えさせていただきたいと思います。

記者

自民党の総裁選で小泉氏は最有力と言われていました。結果は、市長からすれば残念なものだったかもしれません。この結果についての受け止めをお聞かせください。また、敗因と言いますか、最初はいけるのではないかという雰囲気の中、3位という結果であったことをどのようにみえらっしゃいますか。

市長

様々なことが言えると思いますが、まだ若すぎたのかなということを個人的には感じています。ただ、時代はものすごい速さで流れていきます。おそらく、また出番が出てくるのではないかとはいえますが、今はそういう状況ではなかったのかなと理解しています。

記者

まだ若すぎたというのは、どの辺を見てそのように感じられましたか。

市長

難しいですね。私も若い頃から政治家の端くれです。外交、防衛、それから経済、財政、保険、福祉、年金、介護など様々なものを考えた時に、小泉代議士は、いろいろ分かっておられるのですが、感覚的な言い方をされます。私はよく分かっているのです。私は分かっているのですが、おそらく、見ていた国民の皆さんには、十分に理解いただけなかったのではないかと感じています。私は、よく理解をしておりますので、表現の仕方が少し誤解を受けたのかなというところがあります。ただ、やはり誠実で真面目な方ですから、その表現の仕方がかなと思います。実際のところの真意は伝わりにくかったのではないかと感じています。

記者

昨日、衆議院が解散して、来週、衆院選が始まります。地方自治体の首長から見て、今回の選挙では、どういうところが争点になると考えていらっしゃいますか。あるいは各党にどういう論戦を期待したいと思いますか。その2点をお願いします。

市長

政治の信頼を回復する、これは自民党の問題で、私は新自由クラブで、何度も政治倫理の確立を訴えていました。

それとは別に、やはり地方創生です。何度も言うように、ナショナルミニマムとシビルミニマムをもう一回見直さなきゃいけない時期に来ていると思っています。外交、安保は国の問題ですけれど

も、様々な意味でそれぞれの分野というか、持ち分というか、その在り方、やはり地方と国というのを見直さなきゃいけない時期に来ていると思っています。その意味で、地方創生を訴えている石破総理にはすごく期待をしています。その見直しはぜひお願いをしたいと個人的には思っています。一般的な争点は政治の信頼回復、それから裏金問題といろいろ言われています。もちろん、信頼を回復するのは当たり前の話です。ただ、それは自民党の問題であって、国民から見れば、どのような生活、暮らしになるのか、経済も含めてどのようなことを国はしてくれるのかというところが大きいと思います。その意味では、首長としては、やはりナショナルミニマムとシビルミニマムの見直しを注視しています。

記者

石破総理について、総裁選の時は地位協定の改定など、安全保障に関して発言をしていました。しかし、現在はあまりおっしゃってない。今回、自民党総裁、総理が変わったことで、基地があるまちとして、今後についての期待や、何か変革を求めるような考えなどありますか。

市長

現在のところ、国はとうまくやっていると思いますし、様々なことで意思の疎通を図っていますので、それほど変化はないと思っています。ただ、率直にいろいろなことで話し合いを続けさせていただきたいということと、基地協議会の会長としては、ぜひ補助金を増やして欲しいとは思っています。様々な安全保障環境が厳しくなっている中で、基地がある自治体は様々な問題が起きてくると思います。その意味での負担をお願いしたい。それも先ほどお話ししたナショナルミニマム、シビルミニマムの違いという所になるのだろうと思います。

記者

様々な問題というと、特にどのようなところをお考えですか。

市長

やはり安全保障環境が変わってきているということです。その意味で、横須賀に様々な艦船が来ています。そのようなことを考えると、様々な変化が横須賀においても生じてくる可能性はありますので、市民の安全を守りながら、この環境の中で、基地があるまちとして、首長としてやっていかなくてはならない、といつも思っておりますので、あらゆる状況の中でもしっかりと市民を守りたいという意味です。

記者

先日、米海軍司令部で、夜の禁酒の時間などが定まったと思います。それについての所感をお聞かせください。

市長

これから来る人も含めて、米軍が教育ということを認識して、理解をして、いろいろな事件が起きないように取り組んでいるのだと思います。いい話だと思っていますし、当然のことだと思います。

記者

これも最近のことですが、先日、外国の軍隊がうみかぜ公園でパレードをし、それに職員が動員されたことについて、市議会で指摘があり、報道もあったと思います。改めてその経緯となぜそういうことをされたのか、説明していただけますでしょうか。

市長

まず初めに、軍隊ではなく、音楽隊です。議場でもお話をしましたが、第7艦隊の音楽隊、あるいは横須賀で言えば自衛隊の音楽隊のようなものがパレードをしたいという話になって、その時にそれを受けた副市長は、当然のことながら急な話だったので、誰か見に行った方がいいのではないか、国際儀礼として行かなければいけないと考えたのでしょうか。これは当然のことだと思います。本来なら、文化スポーツ観光部、国際交流・基地政策課など、直接の業務に関係のある職員が行けば良かったのですが、これでは少ないと考えて、有休ということをお話せずに、誰か出てもらえないかと伝えたところ、それが業務命令という形で行ってしまったと思っています。国際儀礼として、我々が見学に行く、歓待をするということ自体はおかしいと思いません。ただ、それがいき過ぎてしまったということは反省をしています。

記者

第7艦隊の音楽隊のパレードだったのですか。

市長

例えの話をしています。第7艦隊の音楽隊がそこでやりますよ、あるいは自衛隊の音楽隊がそこでパレードをしますよと言ったときに、儀礼的に、私たちは行きます。それと同じで、軍隊ではなくて音楽隊であるのご理解いただきたいと思います。

記者

艦船の音楽隊だった。

市長

インドネシアの艦船の音楽隊です。

インドネシアの艦船の音楽隊からパレードをしたいという話があり、しかも挨拶にも来られました。インドネシア大使もいらっしゃるということで、これは横須賀市としては、広報もほとんどしておらず、誰も来ない状況でパレードをやるのは、せっかくお話をいただきながら、儀礼上、それは申し訳ないのではないかと思います、儀礼的にパレードに行ったということです。

記者

市長が業務として行きなさいと言ったのではなく、副市長が言ったということでしょうか。

市長

インドネシアの艦船の音楽隊が挨拶に来られた時に、私は別の公務でした。

田中副市長

インドネシアの方が来られて、市長代理として、10月1日3時に表敬を受け、翌日、うみかぜ公園でパレードをすることをお聞きしました。市役所前公園でも、三笠公園でも、中央大通りでもなく、うみかぜ公園ということでしたら、午前中はそれほど人がおりません。事前には、私も職員もインドネシアの音楽隊のパレードをやるということを知らない状態でした。そこで、職員で手の空いている者がいたら、各課2人程度出てくれないかと指示をしました。100名ぐらいかなと思っていたのですが、大勢来ていただきました。

記者

何人来たのですか。

田中副市長

報道によると 230 人余です。

記者

時間について、何時間職務を抜け出したことになるのでしょうか。

田中副市長

市役所から歩いて行って、行き帰り合わせて 1 時間です。

以上